

陸上イージス 代替策は



元空将 織田邦男氏

敵基地攻撃能力の保有は、弾道ミサイル防衛に欠けている能力を補完するものであり、イージスアショアの完全な代替案にはならない。日本が検討すべきは、迎撃ミサイルでは対応できない局面でやむを得ず実施する攻撃能力だ。

日本が保有する敵基地攻撃能力は何かを定義する必要がある。それは発射前の弾道ミサイルを地上で破壊する能力だ。日本に対して1発でも弾道ミサイルが撃たれたら、2発目の発射が準備されている場合、それを地上で破壊する行為は先制攻撃ではなく、専守防衛の範囲内だ。作戦司令部やミサイル関係の通信施設・貯蔵庫などまで含めて破壊するには膨大な攻撃装備体系が必要で、整備には期間と多大な経費を要す。

発射前のミサイル撃破は、軌道が変則的で迎撃が難しいロシア製の「イスカンデル」型ミサイルなどへの対策になり、ミサイル防衛の穴を防ぐ意味がある。

航空自衛隊が、最新鋭ステルス戦闘機F35と、新たに導入する900キロ程度の長射程巡航ミサイルで敵基地を攻撃することは能力的には可能だ。北朝鮮の防空網は強力ではない。公海上

機種・配備場所 見直す

おりた・くにお 東洋学園大学
客員教授。航空自衛隊でF4戦闘機パイロットを務め、航空支援集団司令官(イラク派遣航空部隊指揮官)など歴任。68歳。

を低高度で接近し、攻撃後に素早く帰還する。その能力を誇示することは、相手の攻撃を抑制する観点から戦略的コミュニケーションとして重要だ。

ただ、中距離弾道ミサイル・ノドンは、車載型の移動式発射台から撃たれるため、攻撃目標の特定が極めて難しい。攻撃には、人的諜報活動による情報(ヒューミント)を含め、米軍などの情報に頼るしかない。

現行の防衛大綱にある「平素から常時持続的に我が国全土を防護する」体制を構築するには、やはりイージスアショアが必要と考える。移動式で陸上配備型の「THAAD」(最終段階高高度地域防衛)では防衛範囲が狭く、6基でも日本列島全体をカバーできない。費用対効果ではイージスアショアが勝る。

ただ、イージスアショアの機種や配備場所などは見直すべきだ。導入予定だった機種は2基で7000億円のうち、改修費に数千億円かかることが計画撤回の要因になったようだが、ポーランドやルーマニアに配備された機種は1基800億円程度だ。最新鋭にこだわる必要はない。

配備場所は、陸上自衛隊の基地に限定せず、空自の高射隊基地なども候補に加え、プースター落下が問題にならない場所を選定すればいい。レーダーは、空自の警戒隊の既存レーダーを、イージス用レーダーに置き換えることも選択肢になるのではないか。

(編集委員 笹森春樹)

論点
スペシャル